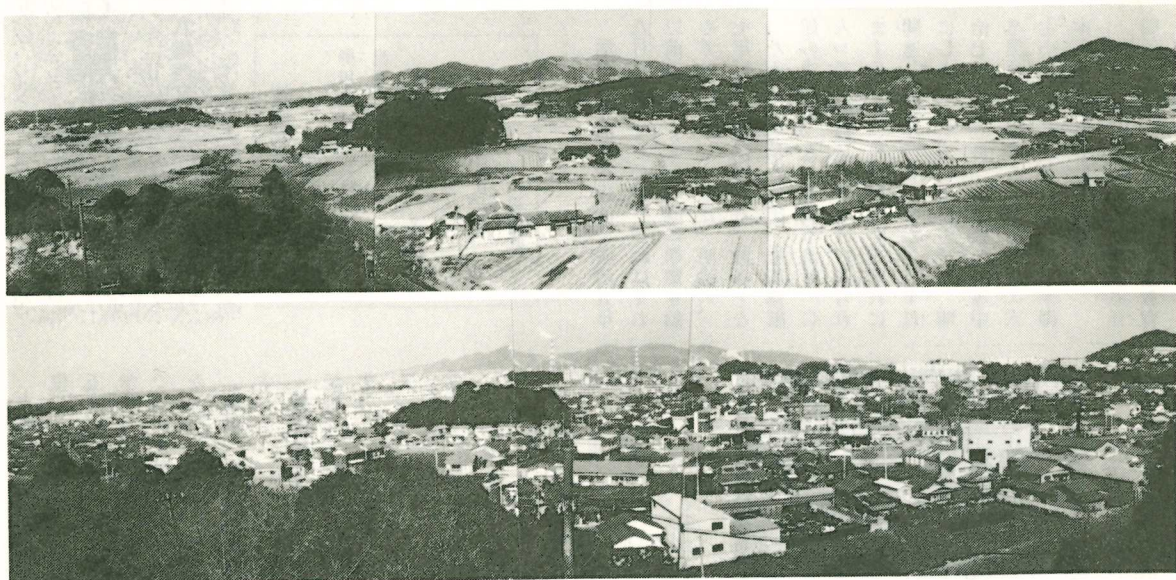


No. 32 55. 7. 15

北九州市の文化財を守る会

会報

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389
印刷 冷牟田印刷合資会社
北九州市八幡西区光明二丁目
電話 601-1717(代)



(上) 開発前の引野地区と (下) 現在の同一地区。中央の丘は十二所神社。

八幡西区に住宅の郊外化、いわゆる、ドーナツ化現象が現れ始めて久しい。戦後に始まった団地化は、町上津役、三ヶ森、引野、本城、穴生等の地区の様相を一変させ、更には、楠木・友田・光貞台・醫生が丘等の本城地区、下上津役団地・ひまわり台等の下上津役地区、大谷・馬場山・金剛に続く団地、小嶺団地周辺、中間市通り谷に続く香月東洋緑ヶ丘地区、南町より西町・高見台・泉ヶ浦と続く永大丸地区、榊姫神社より美原町・若葉町と連なる永大丸、引野地区等枚挙にいとまがない程である。黒崎・折尾周辺でも、岸ノ浦・鳴水・茶売、吉野団地、萩原や旧日吉台地区、浅川地区等飽和状態とも思える程である。この現象の裏には、戦後の住宅事情はもとより、中心部企業の事情、公害による疎開、交通事故の変革、道路事情の整備、団地入手の難易等々種々の理由はあるであろう。開発、発展は、一面では新しい地域社会の形成、歴史の進展ではあるが、反面、少なからざる文化遺産が散佚したり、消滅したりしている。二年前の本紙二四号で触れた盆踊り等の民俗行事については割愛し、その他の場合の若干について触れてみよう。
(1)本紙6頁に示められている「曲里の松並木」等の場合、地域の発展と用地の問題、虫・公害の問題等が関係している。市の文化財に指定されているが、年々減少し、残り数本となっている。旧長崎街道に残る唯一の街道松であり、地域社会を精神的に豊かなものとするためにも、今後如何に愛護すべきか。
(2)永大丸・香月・馬場山・本城等の地区よりは埋蔵文化財が可成り発掘されている。近來の機械力による開発は田野、山林の地形をも一朝にして変えて了い、久振りに訪れると戸惑いさえ感じる。新しい歴史の誕生ではあるが、歴史を考へる上では多くの不便も生じている。遺跡も埋蔵文化財のある場合には法的に規制されており、不十分ではあっても記録だけでも残るが、原位置より知られず失われていくものも少なくないであろう。新幹線や北九州直方道路の敷設のように公共性の強いもの、業者による宅地造成、両者に見られることである。記録は残り、新しい歴史の発見はあるが、何百年、何千年の遺跡は一瞬にして失われる。開発、発見と保存、その史料価値の問題はあるが、ジレンマに似たものを感じる。記録による保存のみでなく、せめて、残せるものは如何にして残すかを考へるのが、後世に対する現代人の義務ではなからうか。
(3)近來の生活様式の変革は、在来住居の新改築を促しているが、それを契機に、生活、生産等に関する民俗資料の散佚や古文書の逸失を屢々招いている。早急な資料の再発掘と保存が、既存の資料の公開と共に一大関心事である。
「文化財を守る会」の存在理由の一端もこの辺にあるのではなからうか。(N)

地域開発と文化財の保存

54年度会員数及び55年度会員数

Table with 4 columns: 種別, 区別, 54年度会員数, 55年度会員数 (6月30日現在). Rows include 一般 (門司, 小倉北, 小倉南, 若松, 八幡東, 八幡西, 戸畑, 市外), 小計, 賛助法人, 団体 (一般, 学校), and 合計.

バスによる文化財めぐり

第二十一回バスによる文化財めぐりは、清澄な空気と溢れる緑に彩られた田園都市、八女を訪ねることにしました。八女といえはすぐにお茶を連想しますが、この地方には六世紀ごろ中・北部九州を統率した筑紫の君、磐井の墳墓として有名な岩戸山古墳をはじめ特徴をもった古墳が数多く所在しています。また庶民の中から生まれ八女地方の民俗に育まれて現在に至る福島燈籠人形や、日本の伝統工芸である仏壇、石灯籠、和紙、提灯なども製作されています。
今回は郷土史研究者・江下淳先生の御説明で、日頃見る機会の少ない燈籠人形を中心として、幾つかの文化財と八女中央茶園を見学することになりました。
なお当初予定していました和紙、石灯籠、仏壇製作の見学が、祭日のため休業となり、やむなく中止することになりましたので、悪しからずご了承ください。

見学先

福島の燈籠人形

宝暦十一年の燈籠献納から始まり、飾人形、唐子細工人形など変遷を経て、久留米のからくりの名人田中儀右衛門の創案により、現在の間接操法になったと考えられている。人形遣いは下遣い、横遣いに分かれ、下遣いは六人で床下から糸で操作、横遣いは舞台両翼各六人ずつで、細い竿を押ししたり引いたりして操作する。離子方は舞台(組立式)の二階に連座し、三味太鼓に合わせて地唄風の長唄をうたう。上演曲目は歌舞伎から学んだものが多いが、現在「玉藻前」「筑紫湯名島詣」など霊驗説話を含む八曲が残されている。重要無形民俗文化財。
岩戸山古墳
八女丘陵古墳群の中央部にあり九州で最大級の前方後円墳。全長

乗場古墳

彩色の壁画がある前方後円墳。墳丘は二段築成で、全長約七〇m 大半は盛土よりなっている。石室は後円部に位置し、南に開口する複式の横穴式石室で全長は約一一mを測る。壁画は赤、黄、緑の三色による三角文、同心円文などで後室、前室の各壁面の下半分に描かれているが、消失している部分が多い。国指定史跡
石人・石馬
正福寺に保存されている石人・石馬は岩戸山古墳出土のものといえられている。石馬は二個に分かれて、首部、脚部を欠いているが杏葉を付けているのがはっきりと

事務局だより

◇会報三十二号ができましたのでお届けします。なお今回は八幡東支部の担当で、発行は十月十五日の予定です。
◇本年度の最大目標である会員の増員については、役員をはじめ会員の方の熱意で別表のとおり成果があがっています。しかし新会員の中には、このような会があるとは知らなかったという方もいましたので、今後ともいっそうのクチコミをお願いします。
◇六月三十日現在の会員の方に日韓文化交流展の招待券と割引券を同封しましたので御利用ください。

日時 九月二十三日(火) 秋分の日
参加料 一人につき四千円
募集人員 八十六人(バス二台) 先着順
締切日 八月三十一日
申込方法 参加料を添え直接事務局まで(電話での予約も可、ただし参加料は締切日まで必ず持参のこと)
集合場所 若松区役所前 午前八時
出発時間 小倉駅北口 午前八時十五分
昼食 岩戸山古墳公園。弁当、水筒持参のこと。
帰路 小倉駅着 午後七時予定
講師 郷土史研究者 江下 淳 先生

分かり、美しく飾った堂々たる馬の雄姿を彷彿させる。県指定考古資料。
埴輪窯跡
昭和四十六年に発掘された二基の埴輪窯跡
八女茶
応永十三年、周瑞禪師が明国から持ち帰った茶の種子をまき、製法を授けたのが八女茶の始まりと伝えられている。その後、自然生として伝播した山茶が、だんだん庶民に伝わり、宝暦・明和・天明に至り茶業として成立する。さらに文政・天保年間には久留米、柳川両藩の奨励で茶の生産はますます高まり、現在の産地を形成するに至っている。

穴生小学と鷺山校

八幡西区 吉田一芳

明治五年八月「学事奨励に関する仰せ出され書」により、各地に小学校の創設がすすめられたと言われています。

その頃、穴生には碩学の波多野直足先生が隠棲されていた様です。

波多野直足先生は黒崎の岡田宮宮司としての家柄で、福岡藩の西学、甘棠館に学ばれ、亀井門下の俊足としてその名は高く、東西の文人との交遊をもたれた方です。

たまたま穴生の鷺山々麓に居を求められ、この地をこの山の名に因んで鷺山とつけられたことから拝察しても充分首肯出来ると思えます。

この鷺山は穴生にある浄土宗弘善寺の裏山でありまして、往事、鷺が住みつき、その糞によって樹木が繁茂し、鬱蒼たる容相だった様です。

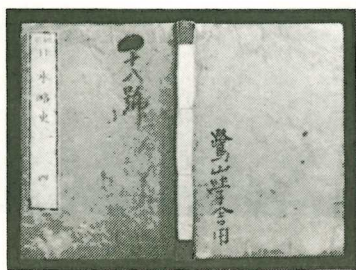
この附近には鷺田とか小鷺田とかいう字名もあるところから、鷺の生息地であったであろうことは容易に想像されます。

明治五年五月廿五日の県からの指達書が次の通りであります。

遠賀郡熊手村祠掌
波多野直足
御用候来ル晦日第十字
出應可致候也
但病氣二候ハ、名代不苦
候事
壬申 五月廿五日
福岡県

学制の文部省布達は、明治五年八月三日付ですので、これはそれ以前のことですが、既に準備を始めていたのでしょうか。明治六年、七年に小学が開設され、教員となつた人は、明治六年頃、福岡修猷館の中にあつた「学取調所」に入つて、教員免許を受けておられますので、この呼び出しもそれに關連したものでしょうか。いずれにしても、これによって、明治七年二月二日、小学教則四等中卒業免許を得られ、鷺山小学(穴生小学)教員となられたことが御本人の学術履歴にあります。

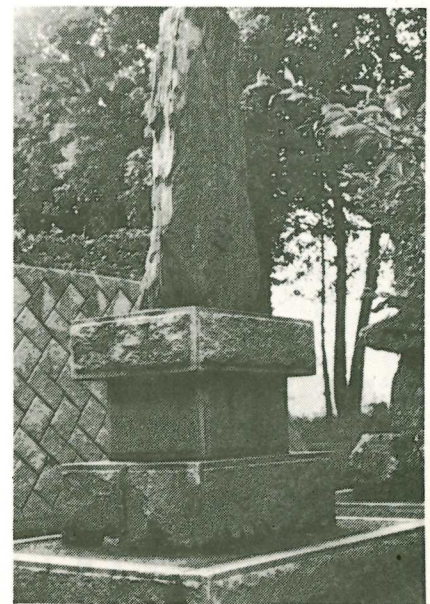
この小学校のあつた場所は、現在道路敷地となつて消えているようですが、昔、弘善寺の境内に見



鷺山学舎教科書

穴生小学
中等小学全科之大試験ニ
中等ノ点ヲ得テ卒業候段
奇特ノ事ニ候二付、賞置
候事
明治十二年十一月五日
福岡県

当時の穴生は戸数八十五、六戸位で、記録では、教師一、男生徒五八、女生徒二とありますが、勉学に余力のある家庭は少なかったであろうから、児童数も多くはなかつたのではないかと思われる。「教師一」が鷺山先生と思われる。



波多野先生之碑

な藤棚があつて、その中に四国八十八ヶ所の札所があり、その入口附近の二十坪ばかりの土地ではなかつたかと思われま

今は寺の山門左下に札所が移されていますが、その入口を示す碑が残っておりましてので大体的見当はつく様です。

鷺山先生は文政八年二月の生れで、明治三十五年六月、七十八歳で逝去されています。

十二歳で福岡に留学されたと言われていますが、その後鞍手郡磯光村の漢学者上野浪江先生に師事、

秋月の松本大式先生に皇典を習い、伊丹又兵衛先生より古帖法書法を

修され、書は顔真卿、米元章を好まれた能書家でありまして、岡田宮には沢山の書が残されているようです。拙宅にも鷺山先生の短冊数葉があり、大切に保存しています。

岡田宮の境内に翁の御偉徳を追慕する、記念碑が建立されていますが、その寄附者名を見ますと、地元黒崎は本より、穴生、陣ノ原、本城、若松、戸畑と遠賀郡一円にかけての人々の名前を見ることが出来ます。

現在、岡田神社境内に、波多野正度先生の碑と並んで建っている「波多野先生之碑」には、漢文で次のように刻まれています。

波多野直足翁墓標
翁諱は直足、字は義伯、通称民部。姓は波多野、鷺山と号す。樵者は一に桃垣内主人と称す。筑前黒崎の人、世々岡田宮神官為り。父は従五位の下、駿河守直繩、母は泰氏にして五男あり。翁は其長子。翁福岡藩士石川八郎兵衛の姉を娶る。子無く末弟正度を養ひて嗣と為す。翁従五位の下に叙し、安藝守に任じ、黒崎、吉田、則松三村

尾倉城山について

八幡西区 竹中岩夫

社官、河守宮を兼掌す。若冠にして学を好み、亀井昭陽、松本大貳に贊を執り、和漢二書を研窮し、遂に穴生鷺山下に居を卜し、後進を教授し、後に鷺山校と為す。教員生徒益々進、官賞として書籍を賜ふ。翁詩は陸放を慕ひ、翁書は米元章を模す。和歌は香川景樹に倣ひ皆其温奥を極む。人以つて三絶と為す。翁性謹厚にして、又潔癖あり。座中點塵無し。酒を嗜み喜びて演じ戯る。人に接するに溫柔、書生に待するに懇切、毫も倦態無し。花晨月夕瓢を携へ、友を誘ひ倡和慰藉す。其書は詩に及び、歌人争ひて之を珍襲す。明治三十五年六月二十三日没。享年七十八。故に舊門人追慕已ます。相謀りて將に資を出し、碑を建てんとす。

八幡東区尾倉に山城のあつたことは江戸時代の文献に見えるが、それがどこにあつたか、もう知る人はないようである。そこで関係文献をもとにして、その位置を探つてみたいと思ふ。

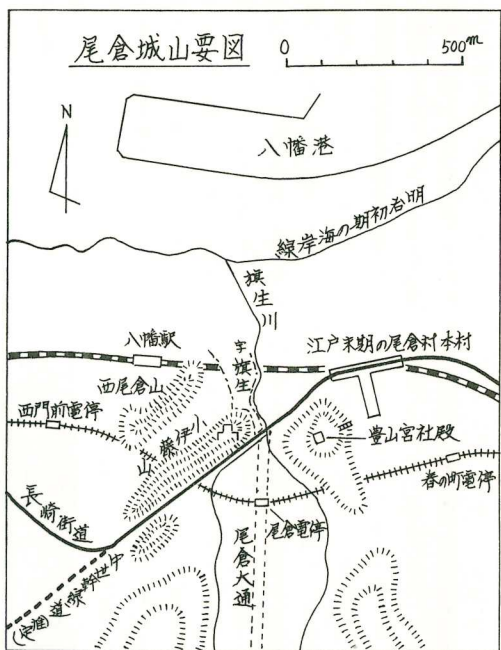
江戸時代後期に書かれた筑前国統風土記付録は、次のように述べている。

文を余に求む。余乃ち其行状に據り其概略を序すと云ふ。
明治三十七年仲秋
正木昌陽木鷄撰
末松幽谷謹書

撰文の木鷄正木昌陽は福岡藩士にして、初名善太夫。幼にして学を好み、藩費修猷館に入り、井上周盤、原田北溟に学ぶ。嘉永五年に修猷館加勢役に任ぜられて以来、助役、本役、学生取締を経て明治四年副督学となる。其後、八幡宮祠官、香椎宮権祿宜、同権中講義を務む。明治三二年藍綬賞を受け、三八年七月一四日に没した。揮毫者末松幽谷は現八幡西区陣原の人。洞南村初代村長でもあつた末松貫一郎氏。現世帯主は末松靖生氏です。

尾倉村古志 本編に見えず。村の西南にあり。麻生鎮里といへる者、小早川隆景卿の與力となり此城を守れり。山上平らかなる所五畝ほどあり。井泉の跡あり。

また、明治初年に書かれた福岡県地理全誌は尾倉村の項に城山村の西南三町にあり。



と、前者と同じ方向を示し、更にその距離を述べている。

両者のいう「村」とは尾倉村の本村を指すが、これは製鉄所南門付近の旧長崎街道沿いであつた。その中心付近から西南へ三町、つまり三三〇メートルほどの所

といへば、西本町二丁目五番付近になるが、昔はこの付近から市立八幡病院(西本町四丁目一番)の位置にかけて、細長く続く「小伊藤山」という山があつた。

この山は大正十二年末から切り取られて姿を消したが、その北東端、つまり西本町二丁目五番付近が最も高かつたようだ。だからこの城は、ここにあつたとみてよい。波多野家文書(第二輯)の尾倉村言伝に、
一、豊山後二城山有り。堀ノ

跡アリ。

とあるが、「豊山の後」とは豊山八幡神社神殿の後ろ側(西方)を意味するから、この記事からも前記の位置にあつたことは確かである。

また同文書の戸明宮縁記(起)に、

今の尾倉村旗生乃城主と見え、太宰管内志は、遠賀郡尾倉村にも幡生ヤシキと云所ありと言。

と述べている。

昔は西本町一丁目一七・一八・一九番一帯の小字を「旗生」(はたぶ)といったが、ここに「幡生」という武士が住む幡生屋敷があつたのではなからうか。そのすぐ南西側が山城のあつたと推定される小伊藤山北東端である。

古代のロマンを求めて 日韓文化交流展

期間 1980・7・19～9・14
(毎週月曜日、日、月、火休館)

主催 北九州市教育委員会
韓国国立中央博物館
外務省、文化庁
大韓民国文化公報部
駐日本国大韓民国大使館

後援 北九州市立歴史博物館

場所

入場料
大人 六〇〇円
学生 四〇〇円
小人 二〇〇円

こうしたことから、この山は幡生氏の詰城(つめのしろ)であつた可能性が高い。詰城とは敵襲の時、駆け登つて防ぎ戦う城のこと、中世の山城は、こうした防衛用の城と居館から成り立っている場合が多い。

中世文献に「幡生兵部丞」(小田家文書)、「幡生土佐守」(麻生文書)などの人名が散見されるが、幡生氏は小倉(尾倉)に知行を持つ麻生氏重臣だったとみられることから、この城も麻生氏支城の一つとみてよい。

その目的は、豊前側から侵入する敵を食い止めることであつたと考えられる。

土中誕生と夜泣石

八幡西区 政時義明

小松佐京の小説に「雲母の薄片」という作品がある。とても面白い発想にもとづく「むかしむかしの物語りである」。

その概要は、

- (1) おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行き、桃が流れてきた。
- (2) 家に帰ると、うらの畑で、ポチがワンワンとないた。
- (3) すると、竹やぶの中の一本の竹の節がひかっている。
- (4) その竹の中から男の子がでてくる。その子は、とほうもない意気者で、
- (5) そこへ金太郎のような大きな男が、もうひとりでてきた。
- (6) ふたりは、けんかしながら龍宮城へ行くことになり、
- (7) 泥で作った船に、大きいのが乗り、
- (8) お椀の舟に箸の櫂で、小さい方が乗る。
- (9) と、ところが、両方共ひっくりかえって流されるが、小さい方の男の手に何かふれる。それは、とんがり頭巾で、この男は赤頭巾ちゃ

んになる。
(10) いつの間にか、目の前が真っ暗になって、やがて明るくなると、桃の中からでてきた。

というような、他愛のない話であるが、これは、百八十歳になる老人が、火星植民地からやってきた青年に、語って聞かせるというのが当妙であるわけである。

作者が意図するところは、例えば、現代は情報化時代といって、あらゆる情報が、日々蓄積されていく。このため、すべての情報や知識が混り合い、人間は、自分自身全体何者であるかわからなくなってしまう。つまり、自己崩潰してゆくのではなからうか……という警鐘の意味を含めて、書いた作品であろうと思うが、一方、われわれがむかし話というジャンルを考える上からも、たいへん興味深い仮説といえる。

さて「八幡西区上津役の小嶺に「子を抱かしよ。石抱かしよ。」という、むかし話がある。

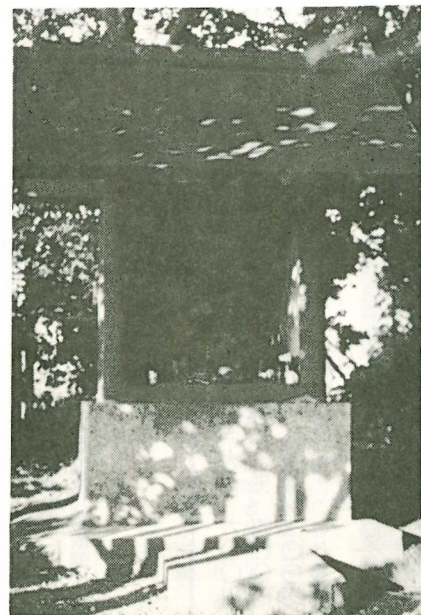
——とんとむかしのことやったんじや。
小嶺の浦ン谷に、子を抱かしよとか、あずき峠というところがあります。

これはですね。
若い女子が腹ごもったまま死んで、そこにいけちよつたらしいです。その付近が林で雑木がはえちよりました。

夜通ると、「あずきをとげとげ」という、あずきをどぐ音がしよつたらしい。なんやろうかと思つて、行ツチみりや、まア姿は見えんけど、子供を抱いてくれちゆうて、子供を抱かしよちゆうですね。その子供が石やつたらしいちゆうことです。

死んだ女の子が子供を妊んだまま埋められたもんやけ、子供かわいさにでてきよつたらんやろつたい。
(能美道男氏 77歳)

——あずきをどぎよつたチゆうけど、米をどぎよつたともいいます。米のどぎ汁で、乳をこきえて育つる。そういうふうなことで、子供かわいさにですね。その執念から、「米をとぐから、ちよつと子供を抱いてくれんやろか。」チゆうて、いつまでたつてもとりにこんもんやから、よくみると石を抱いちゃよつた。
その石を抱いちゃよつたときにや、



現在のヤカラ神社

子供のごとあつたチゆうことです。ひぎをこう出してすな(あぐらを組む)。その間に、こう抱かには、まともに、こうやちよつたチ(腕に抱く恰好)、足が折れてしまふげな。
まあ、かわいそうな話ですけどな——。
(大和政義氏 75歳)

そういえば、同じ上津役の上の原に「やから様」という石祠がある。

夜泣きする幼児の願をかける、と、夜泣きしなくなるというので、多くの参詣者があつたという。

——寿永二年、木曾義仲に破れて都落ちした平家一門が、最後の拠点とした太宰府も、豊後の緒方三郎に追われて、みんな散り々々になった。その落人の中の二人連れの女が、道に迷い、この地にたどりついた。しかし、今はもう一

歩も歩くことができず、谷間に下りて野宿をしていた。

その頃、平家の落人を追って、ここを通りかかった豊後国の伊藤兵衛尉の耳に、幼児の泣き声が聞こえた。兵衛尉は怪しんで、泣き声をたよりに、そこらあたりをさがした。二人の女は、最早、これまでと幼児を殺して共に自害し果てた。

そして、主人とおぼしき女官は、苦しい息の下から「乳飲み児が、

やから(やんちゃ)をいわねばだれしるまいに、宿命とはいえ心残りが多いぞ。世の中で愛し児のやからのために、どのように女たちは困つておられるかわからない。わたしとあとは、夜泣きに苦しむ母、やからになやむ母たちの苦しみを少しでも救つてあげたい。」と、息をたえたと

ちなみに、旧筑前国では、幼児たちが無理をいったり、だだをこねたり、やんちゃをしたりして、母や祖母たちをこぼらせ、困らせると、「そんなやからをいうと、ええものあげんぞな。」と、たしなめるということである。

小嶺の「子抱かしよ」は、土中誕生の「夜になると、赤子の泣き声が聞こえる恐い場所」であり、

江戸時代中期の儒医の大家

香月牛山

八幡西区 門司宣里

香月牛山(一六五六—一七四〇)については、既に稲葉倉吉氏や木島甚久氏らの先生方によって残されたものがあるが、ふるさと「再発見」ということで敢えて取りあげさせていただいた。

牛山は現在の八幡西区香月の出

この「やから様」は、逆に夜啼が止むという「夜啼石、又は夜啼松」の流れを汲む、むかし話であろうと思われる。
むかし話というものは、「ユリシーズと百合若」のように、地球上のどこで発生し、どこをとつて、どう伝わってきたのか、はっきりしない程、全国に散在し、世界のあちこちにある。(八幡西区の浅川から、若松区二島に伝わる「弁慶の足跡」は、巨人伝説——ダイダラボッチにつながるものか?)

おこり、中世に浮沈を重ねた北九州の豪族で、「吾妻鏡」等に勝木或は加都伎とみえている。この氏から出ている文化関係の代表者は時代は異なるが、浄土宗鎮西派の祖といわれる鎮西上人(聖光上人)と、この牛山が双壁といわれている。
ところで、牛山は貞享三年(一六八六)の三十一歳のときから十四年間、中津藩主小笠原長胤の侍医として仕官している。しかし、長胤は失政等のため幕命で一時所領を没収されたが、のち許され弟の長円が継いだものの、藩政立直しのあおりで牛山は人員整理の対象にされている。

牛山が中津藩に仕えたのは、鶴原玄益の同門であった日田の医者相良対庵の紹介によるとか、或は貝原益軒の推挙でとかいわれている。中津時代の牛山は医学のほかにも博物研究から漢詩や連歌・著作等多様な文化活動を行っており、元禄二年(一六八九)には「遊豊司命録」、同五年には「婦人寿草」等を著わしている。

貝原益軒も「筑前国統風土記」や「黒田家譜」編纂後の元禄七年に、黒田孝高(如水)の古戦場等調査のため両豊を巡っているが、その「豊国紀行」の中に往復共牛山を中津に訪ねたことがみえてい

不運にも中津藩の人員整理にあ

つた牛山は、元禄十二年(一七〇〇)京都に上り主に研究や著作の生活を送っている。在京中またまた大覚寺法親王が病根不明の難病に罹り、多くの医者が診たが治療法がつかめなままの状態のとき依頼を受けた牛山は、たちどころに病根を見極め治療法を言上。しかし、他の医者の猛烈な反対にあつているさ中に、そのことが上皇の耳に達し、上皇は詔をもって牛山に治療を托したという。牛山は心血をそそいで治療に専念し、二ヶ月後には完治させたことから牛山の名前は全国に広まり、門弟は百余人に達したといわれている。

牛山は高倉に六人の古聖人の肖像をかかげた医仙堂を建てたとき、その金言の題字は当時の大臣クラスや著名な公卿等の執筆であったため、人々は「流石牛山先生なればこそ」と褒めそやしたという。十七年間の京都生活を送った牛山は、享保三年(一七一八)頃に豊前小倉藩主小笠原忠雄の再三の懇請に応じて小倉に下つていく。六十三歳のときであった。小倉藩はこの名儒医牛山のために特別の養老年給を支給して優遇したという。

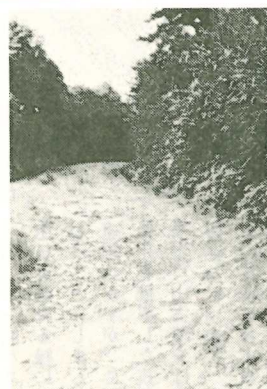
又、京都時代の牛山は伊藤仁齋について儒学を学ぶなど、多くの学者や名僧、文化人とも広く交友しており、在京の文人の名のなで「先哲叢談」という書物にも牛山の名がみえてい

小倉時代の四年目、牛山は小倉藩の名医として知られていた西友鶴の追悼祭文を残している。牛山は小倉時代も読書・研究・著作の生活を送っていたが、七十五歳のとき「わが事既に畢れり」と私器財を縁者に分ち、墓地や木碑まで選定して心静かに死の訪れを待ったという。



香月吉祥寺の牛山寿塔

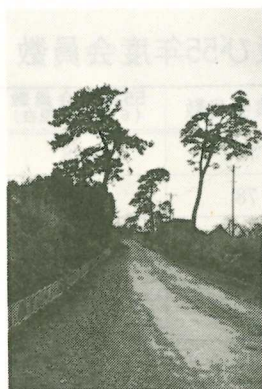
吉祥寺に寿塔二基あり。一に「七十五歳致仕以此月為大限建壽塔于吉祥寺前此所埋骸骨之地」と。一に「做兼好法師之事故豫卜奄地建壽塔。歌曰、所から花の香月も清ければかけをならひの岡にたくえん。享保庚戌歳冬至日、七十五牛山香月啓益則真手自書」とある。



旧石坂の急坂

永源寺の裏門は板が張り替へられ、横板より縦板に変わっており、黒田藩の定紋「藤巴」の入った軒先丸瓦も淋しくなっている感じがするが、山家の薩摩屋が取り壊されてい

も、現在では孟宗山と化し、痕跡も留めていない。上石坂の銀杏で知られる旧立場茶屋、清水氏邸は、壁がブロックに替わっているが、銀杏、建物共に健在。然し、旧前は保存されていた行燈等は朽ちて廃棄されていた。石坂の石坂たる由縁の岩盤の露出した急坂は、コンクリート舗装され、階段が設けられて様相を一変している。



旧緑松並木

旧前は酒蔵であった本陣跡は天理教会の厨房に変わり、本陣の井戸もその中になっている。且つは空地であった郡牢跡にも建築物が見られる。江戸時代には川幡の本場が置かれ、鞍手郡の米を一手に若松方面に運んでいたことをも偲ばせる舟板壁も今では僅かに一ヶ所を見いだすのみとなっている。



旧割子川松並木

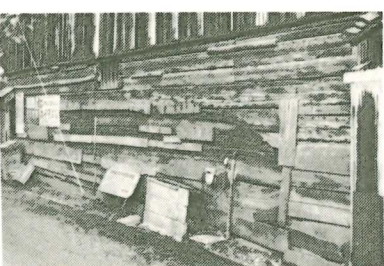
新幹線の開通、九州縦貫道の敷設等で周辺の風景には可成りの変化を生じているが、旧宿内には未だ若干の面影を残している。東構口跡である岡森養水路を過ぎ、旧宿内に入ると、旧の俣ではないが、未だ奥行き深い家が残っている。それでも、近年改築が進み、西構口近くに見られた鋸の歯状に並んだ家並は極めて少なくなっている。全く見られ

(4) 木屋瀬周辺



下代屋敷蔵

現在、貴重な存在となっている。代官小路も舗装により道路が高上げされた感で、旧代官、下代屋敷の石垣が低くなっている。旧下代屋敷の蔵も人が住まなくなつて久しく、全面瓦で覆われている。



舟板壁



鋸の歯状の家並



旧山家宿跡

内野宿は現在の二〇〇号線より離れているので、車の影響は少ないが、旧大庄屋山内本家が完全に廃屋と化していた。冷水峠の登り口の石畳道と首なし地蔵は昔に変わ



旧飯塚宿郡屋

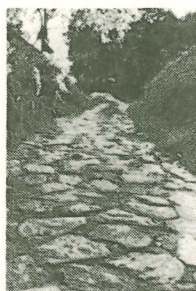
木屋瀬の次の本宿飯塚は全く様子が変わっている。本来の遠賀川である穂波川(飯塚川)は蓋がされ公園と化しており、川幡を偲ぶよすがもない。川縁の住吉宮も電話局と替わっている。郡屋もなくなり

(5) その他の四宿



旧原田宿跡

国道三号線沿いの原田宿跡は車の洪水。旧写真位置を探すのも一苦労。宿はずれ、筑肥国境は国道と鹿児島本線が並走。国境石は旧位置にあるが周辺は変貌。對州領境の碑は背丈よりも高い草の中。



内野の石畳道

旧前、最もよく宿駅の風情を残していた山家の変貌は最も著しい。全て舗装され、トラックの通路と化した町並には昔日の面影はない。僅かに、郡屋、下代屋敷、崩れかけた構口に旧宿駅を感じさせるが、それも永くはないかも知れない。旧前は畑であった本陣跡も宅地と化し、一部は工場への道路に削られている。

筑前六宿二〇〇年の移り変わり

八幡井筒屋二〇〇周年展より
八幡西区 能美安男

それでも長命を保った牛山は、享保十年(一七三四)には「医習先人」を著わし、翌年撰津国四天王寺の遊行寺に芭蕉の碑が建立されたときは、その碑文の撰者にも推されている。牛山は生涯妻を娶らなかつたため、この則が幼児を残して死亡したため門人の貞庵が跡を継ぎ、則道と名乗った。

元文二年(一七四〇)牛山は「蛭雪余話・小児必用記・長命養生訓」等多数の著作や社会的な大きな足跡を残して八十五歳の高齡で小倉に没した。遺体は浄土宗円応寺に葬られ、墓石には「牛山先生香君之墓」と刻まれている。円応寺は堺町にあったが、現在は東清水二丁目に移転。又、香月則道の子孫はその後も小倉藩に仕えたと

若干を取り上げてみよう。

尚、二〇〇周年記念展で用いられた写真は、八幡西市民センター郷土資料室の特別企画展として、去る五月一日より六月八日まで、同センター一階のロビーに展示されていた。

(2) 小倉より黒崎へ

小倉北区紫川に架かる常盤橋を渡ると長崎街道は始まる。展示も常盤橋の写真より始まった。東曲輪より西曲輪を望む写真が欲しかったが、「常盤橋」と書かれた橋の高欄の脇にはポルノ映画の看板が針金で固定されており、絵にならな

荒生田より筑前領に入り、三条の国境石を過ぎ、大蔵に出ると両国橋がある。旧前は「両国橋」の文字が高欄に刻まれていたが、拡幅工事により除かれ、橋の傍に保存されている。

(3) 黒崎より木屋瀬へ



黒崎宿東構口附近は、最近取り壊しが進み、愈々変貌が進んでいる。本陣跡も前は授産所があったが、現在では駐車場と化している。藤田では黒崎の旧称に「隈崎」の名を



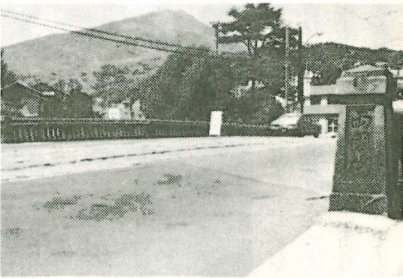
取り壊し前の両国橋



昭和35年の曲里松並木

冠した唯一のものであった「隈崎稲荷社」もいづれかへ移され、商店と化している。黒崎の変化は扱置き、変貌の最も著しいのは「曲里の杉並木」と称されている旧往還であろう。昭和三四年九月には、九州厚生年金病院前の一〇間道路の上より旧養老院横、現小鷲田バス停前のリンガーハットの所までに五九本、

旧道と鳴水方面への道の交わる幸神までに丁度五〇本あった街道松(往還松)は今では数本を残すのみとなっている。旧前は、八幡西区の割子川や緑にも街道松を見る事が出来たが、それ等も全て失なわれ、曲里の数本が唯一の街道松並木(?)となつてしまった。現上津役中学校の向い、清掃事務所裏の山中に残っていた旧道跡



現在の両国橋